22　「」 ─中世の説話集

20年度　専修大学

★　次の文章を読み、後の設問に答えよ。

　西行法師、出家よりさきは、の左大臣の家人にて侍りけり。多年修行の後、都へ帰りて、年ごろの主君にておはしますむつまじさに、後徳大寺の左大臣の御もとにたどり参りて、まづ門外よりうちを見入れければ、寝殿の棟に縄を張りけり。あやしう思ひて人にたづねければ、「あれはア据ゑじとて張られたる」とこたへけるを聞きて、「鳶のイゐる、Ａなにかは苦しき」とて、うとみて帰りぬ。次に、「の大納言はいづくにぞ」とたづね聞きけるに、の思ふやうにもおはせざりければ、あながちに利を求めたる御ふるまひ、「うたてし」とて、たづねゆかず。の中納言は、はやせ給ひにけり。の中将のあり所をたづね聞きて、へゆきぬ。うかがひＢ見れば、はなだのしろうらの狩衣に、織物のふみくくみて、庭の桜をながめて、によりゐたる気色、いと優にて、「徳大寺の御あとは、この人にウおはしけり」と思ひて、なく桜のもとにたちよりたりければ、中将、「いかなる人にか」とたづねられけるに、「西行と申す者の参りて候ふ」と申しければ、「年ごろしたかりけるに」と、ことによろこび給ひて、縁の上に呼びのぼせて、むかしいまのこと語られけり。日やうやうエ暮れにければ、西行も帰りぬ。その後、つねに参りて物語りしけり。

　かかるほどに、「あるべし」と聞こえけり。蔵人頭にかの中将なるべきにあたり給ひたりけるに、中将成経朝臣をなさむと思しめしけり。また、大蔵卿宗頼朝臣を推挙ありければ、ともにＣかなふまじげに聞こえけるを、西行聞きて、いそぎ中将のもとにまうでて、そのよしを語りて、「人に越えられ給ひなば、さだめて世を逃れ給はんずらむ」など申しけるを、中将聞きて、「Ｄまことにさこそあるべけれども、母の尼、堂を立つべき願ありて、そのあひだのことを申しつけたる、出家の身にて口入せむこと、法師にオ似たらんずれば、その願とげて後、あひはからふべし」とこたへられければ、西行、心劣りして帰りぬ。さて、任大臣のついでに、聞こえしがごとく、宗頼・成経朝臣等、蔵人頭にれにけり。その、西行、弟子を中将のもとへりて、Ｅもしやとて事柄を見せけるに、あへて日ごろにかはることなかりければ、また文をもちて、「申し候ひしことはいかに」と尋ねたりけるに、「見参の時、くはしうは申すべき」と返事せられたりければ、「Ｆの人にておはしけり」とて、その後は、むかはずなりにけり。世を逃れ、身を捨てたれども、心はなほ昔にかはらず、たてだてしかりけるなり。

（注１）徳大寺の左大臣……藤原。後出の「後徳大寺の左大臣」「実家の大納言」「実守の中納言」は実能の孫、「公衡の中将」は実能の曽孫に当たる

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　…後徳大寺の左大臣

　　　　徳大寺の左大臣……〔　　　〕……実家の大納言

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　…実守の中納言…………公衡の中将

（注２）北の方の思ふやうにもおはせざりければ、あながちに利を求めたる御ふるまひ……「北の方」が経済的に頼りにならなかったので、裕福な別の女性に実家が心を移したことをいう

（注３）任大臣あるべし……「新たに大臣が任命されるだろう」の意

（注４）院……後白河院。時の最高権力者

（注５）殿下……九条兼実。当時の摂政

（注６）両闕……二名の欠員。蔵人頭の定員は二名であった

（注７）すすめ法師……寺などの建立のために、人々から広く資金を募って歩く僧侶のこと。詐欺まがいの行いをする者もいたため、卑しまれることがあった

（注８）補せられにけり……「任じられた」の意

問１　傍線部Ａ「なにかは苦しき」の意味としてもっとも適当なものを次の①～⑤の中から一つ選べ。

①　なぜ心配するのか　　②　実によいことだ

③　何の問題もない　　　④　何を嫌っているのか

⑤　不愉快でたまらない

問２　傍線部Ｂ「見れ」と活用の種類が同じ動詞は、波線部ア～オの中にいくつあるか。適当なものを次の①～⑤の中から一つ選べ。

　　①　一つ　　②　二つ　　③　三つ　　④　四つ　　⑤　五つ

問３　傍線部Ｃ「かなふまじげに聞こえける」の解釈としてもっとも適当なものを次の①～⑤の中から一つ選べ。

①　院や摂政が成経や宗頼を推す以上、あなたは蔵人頭になれまいと、西行は公衡に申し上げた

②　成経や宗頼がいるため、公衡は蔵人頭の後任にはなれそうにないと、世間では言われていた

③　院や摂政の意向に背くので、自分が蔵人頭になるのは無理だろうと、公衡が西行に伝えてきた

④　成経や宗頼に比べて、公衡では蔵人頭は務まりそうにないと、院や摂政から聞かされていた

⑤　成経や宗頼を相手に蔵人頭を争っても、自分には勝ち目はなさそうだと、公衡には思われた

問４　傍線部Ｄ「まことにさこそあるべけれども」の解釈としてもっとも適当なものを次の①～⑤の中から一つ選べ。

①　院は成経を、摂政は宗頼を新たな蔵人頭に任じたいに違いないが

②　出世争いに負けた者が、世を恨んで職を辞してもおかしくないが

③　院や摂政の助力がないので、私は蔵人頭になれなくても仕方ないが

④　成経と宗頼が蔵人頭になったとき、私は出家をして当然であるが

⑤　蔵人頭の後任を争えば、私が成経や宗頼より不利なのは間違いないが

問５　傍線部Ｅ「もしやとて事柄を見せける」の説明としてもっとも適当なものを次の①～⑤の中から一つ選べ。

①　西行が、公衡は蔵人頭になれなかったのを知らないかもしれないと考え、人事の結果を教えるために弟子を送った

②　西行が、公衡は蔵人頭になれなかったことを悲観して隠居でもしないかと危惧し、様子を見るために弟子を送った

③　西行が、公衡は蔵人頭になれたかも知れないと考えて人事の結果が気にかかり、公衡に尋ねるために弟子を送った

④　西行が、公衡は蔵人頭になれなかったために堂を建立できなくなるのではと心配し、援助するために弟子を送った

⑤　西行が、公衡は蔵人頭になれなかったことを機に出家をしたかも知れないと期待し、確認するために弟子を送った

問６　傍線部Ｆ「無下の人にておはしけり」の現代語訳としてもっとも適当なものを次の①～⑤の中から一つ選べ。

①　人の心がわからない人であったのか

②　この上なく立派な人でおいでだったよ

③　見さげはてた人でいらっしゃったことよ

④　恥を知らない人であったのだなあ

⑤　心の広い人でいらっしゃったのだなあ

◎問７　問題文の内容と合致するものを次の①～⑤の中から一つ選べ。

①　西行は菩提院で庭の桜を眺める風雅な公衡の様子を見た折に、公衡こそ徳大寺家にふさわしい人だと感じた

②　西行は蔵人頭になれなかった公衡を手紙で慰めたが、会って話をしたいという気弱な公衡の返事に失望した

③　西行はかつて仕えた主人の一族を探したが、公衡の他は、会いたくない者や行方知れずの者ばかりであった

④　西行は公衡がずっと蔵人頭になれないことが不満であり、公衡はいっそのこと出家すればよいと思っていた

⑤　西行は出家の身だったが、かつて仕えた主人の一族に取り入ろうとするなど、その心は俗人のままであった

問８　十三世紀半ばに成立した「古今著聞集」にもっとも成立年代が近い説話集を次の①～⑤の中から一つ選べ。

①　十訓抄　　②　日本霊異記　　③　夜の寝覚

④　発心集　　⑤　山家集

【解答】

問１　③

問２　②

問３　②

問４　④

問５　⑤

問６　③

問７　①

問８　①

【現代語訳】

　西行法師は、出家する以前は、徳大寺の左大臣（藤原実能）の家来でありました。長年修行した後、都へ帰って、長年の主人でいらっしゃる懐かしさから、（実能の孫である）後徳大寺の左大臣の御もとに尋ね参上して、先に門の外から（屋敷の）中をのぞいたところ、寝殿の棟に縄を張ってあった。不審に思って人に尋ねたところ、「あれは鳶をとまらせまいとして張られた（ものです）」と答えたのを聞いて、「鳶がとまることの、何が問題なのか、何の問題もない」と言って、不愉快に思って帰った。次に、「実家の大納言はどこに（いらっしゃるか）」と探し求めて（様子を）尋ねたところ、北の方が（実家の）思うように（経済的に頼りに）おなりにならなかったので、（実家は裕福な別の女性に心を移して）身勝手に利を求めた御振る舞い（をしたと聞き）、「気にくわない」と言って、訪れて行かない。実守の中納言は、すでにお亡くなりになってしまった。（そこで）公衡の中将の所在を探し求めて（所在を）聞いて、菩提院へ行った。（中の様子を）のぞいて見ると、色の（表で）裏は白色の狩衣に、織物の指貫を裾長にはいて、庭の桜を眺めて、高欄に寄りかかって座っている様子は、たいそう優雅で、「徳大寺（家）の御後継者は、この人でいらっしゃったよ」と思って、することなく桜のもとに近寄っていったところ、中将が、「どういう人であるか」とお尋ねになったので、「西行と申す者が参上してございます」と申し上げたところ、「長年会いたかったのに（会えなかったのだ）」と、ことさらにお喜びになって、縁の上に呼びのぼらせて、昔や今のことをお話しになった。日が次第に暮れてしまったので、（公衡は中に入り）西行も帰った。その後、（西行は公衡のもとに）いつも参上して語り合った。

　こうしているうちに、「新たに大臣が任命されるだろう」とされた。蔵人頭にあの（公衡）中将がなるべき人に当たっていらっしゃったが、（後白河）院は、中将成経朝臣を（蔵人頭に）しようとお思いになった。（摂政）殿下はまた、大蔵卿宗頼朝臣を推挙なさったので、二名の欠員ともに（公衡は蔵人頭の後任に）なれそうにないと世間では言われていたのを、西行が聞いて、急いで中将のもとに参上して、その次第を語って、「人に越えられなさったならば、きっと出家なさろうとするだろう」などと申し上げるのを、中将は聞いて、「本当にそのように（私は出家して）当然であるが、（私の）母の尼が、（仏）堂を建立しようという願い事があって、その（建立までの）間のことを（私に）申しつけた（ので）、（私が）出家の身で（仏堂建立の）口添えをするようなことは、（詐欺まがいの）すすめ法師と同じように見えてしまうだろうから、（それを避けるために）その（仏堂建立の）願い事をなし遂げた後に、（出家のことを）相談したい」とお答えになったので、西行は、残念に思って帰った。そうして、大臣任命の機会に、噂のあったとおり、宗頼・成経朝臣等が、蔵人頭に任じられた。その朝、西行は、弟子を（公衡）中将のもとへ送って、もしかして（公衡は蔵人頭になれなかったことを機に出家した）かと事の様子を見せたところ、（公衡中将の様子は）少しも日頃と変わることがなかったので、また手紙を使って、「（私があなたに）申し上げていました（出家の）ことはどのように（なりましたか）」と尋ねたところ、「（直接）対面（する）ときに、くわしく申し上げるつもりだ」と返事なさったので、「（公衡中将は）見さげはてた人でいらっしゃったことよ」と言って、その後は、（公衡のもとへ）出かけて行かなくなってしまった。（西行は）世を離れ、出家してしまったといっても、心はやはり昔と変わらず、気性が激しく一徹であったのだ。